

うつくしやま だより

学校の教育目標

自立をめざす生徒

～自分を生かし 社会に貢献できる人間になる～

学校だより

R3. 2. 26

山県市立美山中学校

<生徒のみなさんへ>

3年生の卒業が間近です。新型コロナウイルス感染症の影響で、例年とは大きく違った中学校生活を終えて卒業する訳ですが、そんな環境の中でも自分達にとって大切な心を忘れないように努めてきた3年生のみなさんに感心した1年でした。忘れられない卒業の思い出が私には2つあります。1つは**小学校の卒業式の日**のことです。卒業式の前日、担任の先生が、自分は卒業式の日朝早く来て、お世話になった教室を掃除したと話したのです。他にも何かした子もいたと聞いたけど、自分が掃除したことは誰にも言わなかった。それは誰かに言わなくても自分の気持ちでやっただけだし、思い出になると思ったのだと。これを聞いて私は翌日の式当日朝早く、教室のぞうきがけをしました。みんながあのお話を聞いたのだから、他にも誰か来るかもしれないと思ったので朝一番に登校しましたが、早く来た子は他にはいませんでした。おかげで、一人で思い切り掃除が出来ました。もともと掃除が嫌いでしたので、日頃の掃除をまじめにやっていた事への罪滅ぼしもありました。ですからやってみて、そんなに誇らしい気持ちはありませんでしたが、すがすがしい気分で教室に朝日が差し込んだのを鮮明に覚えています。このことは担任の先生にも仲間にも誰にも言いませんでした(中学生は制服が汚れるので、してはいけません)。もう1つは**中学校の卒業文集**のことです。文集委員になり表紙や構成をいろいろと考えていましたが、自分が書く作文の中身をあまり考えていなかったで、おもしろいギャグをたくさん書いてやれと、思いつくままに書きました。同級生でギャグとは縁遠いE君の書いた作文はむずかしく「私の脳裏に強く焼きついているもの…」というような書き出しだったと思います。私は「本当にEはギャグの楽しみも知らないつまらない人生を送っているんだなあ」と思いました。約10年後、教師になって初めて3年生の担任になり、生徒が卒業文集を作りたいと言うので、ふと自分の中学時代の卒業文集を読んでもみることにしました。その時の衝撃も忘れられません。自分の書いた作文はなんとも内容の無い薄っぺらなもので、一方E君の書いた作文は教師の身でありながら、読んでとても感動しました。いかに自分が薄っぺらな中学時代を過ごしていたのかを思い知らされました。そしてE君は実に深く考えて生きていたことを知りました。この話を思い出すたびに、今は亡き動物写真家の星野道夫さんが**小学校卒業**の時に書いた「**浅き川も深く渡れ**」という言葉が思い出されます。12歳の子が書いたとは思えない言葉です。ぜひ、みなさんにも知っておいてほしい言葉です。思い出は人それぞれです。大きな行事を仲間と共に過ごしたことは強烈ですが、一人一人に自分なりのエピソードがあり、後で笑って語れるような思い出があれば十分だと思うのです。**3年生と語る会**は、そういう意味では3年生のみなさんが、それぞれ実感して学んだことや後悔したことなどを後輩のみなさんに話してくれた、とても貴重な時間でした。個人の思い出やエピソードの中から、ぜひ後輩のみんなには伝えておきたいという内容を選んでくれた訳です。1、2年生のみなさんは、聞いていて遠く感じたりよく分からないことがあったりしたかも知れませんが、それが後でジワッと分かってくる時が来るのです。その時、先輩のありがたさがより分かるのかも知れませんね。画面「努力した気になってはいけない」→

<保護者の皆様へ> 緊急事態宣言が解除されましたが、県内では大規模なクラスターが発生するなど予断を許しません。今後も宣言解除の有無に関わらず、無事に3年生が全ての入試を終え、卒業式を挙行し、在校生が年度末まで安全に授業を受けられ、修了式を迎えられることを切に願い、皆で努力していきます。

